

エピソード記録を通して学ぶ

～保育科一年生の「観察実習」と「教育実習指導」の授業で～

保育科 久保田 貴 子

平成27年9月7日から12日までの1週間の「観察実習」において、観察実習日誌に加えてエピソードの記述を課した。保育の場での経験をもとに保育について理解を深めることを願い、その後の「教育実習指導」の授業でそれらのエピソード記録を活用した。

互いのエピソード記録を通して観察実習の場での一部を共有することとなり、子ども理解や保育者としての姿勢や援助の在り方などについて学び合った。

1. はじめに

保育について記録する際、自分が観察したことや実践したことの中から何を取り上げるか、それをどのように文章化するか、まとめようとする時になって、自分が何を見ていたのかが見えてくる。「あのことを」と進む時があれば、「もっとよく見ておけばよかった」と振り返ることもある。記述することは様々に考えることであり、保育について記録することで私達は見方や考え方が広がり深まり高まっていく。

そのために、初めての実習で観察実習日誌とは別に、エピソードを2例、考察を加えてパソコンで仕上げることを課題とした。何を取り上げるかも字数も自由。実習終了2週間後に提出することとした。

その後「教育実習指導」の授業で、互いのエピソード記録から学び合う場を作った。

- ① 6～7人のグループで互いのエピソードを読み合い、その中から2点を選ぶ、
- ② 選ばれた学生は全体の場でエピソードを読み発表する。

その際、「エピソード記述に取り組んで」「グループの友達との読み合いや全体発表を通して

て学んだこと」「これからの課題」についての記述を課した。

長短はあってもすべてのエピソード記録から、保育の場で心動かし実習を行ったことが伝わってきた。また、その後の授業でも互いのエピソード記録を通して実に多くを学んでいる手ごたえを感じた。

これらを共有することが保育を学んでいる私たちの更なる学びにつながると考え、学生が会員である本誌にまとめることとした。

2. エピソード記述に取り組んだ学生の思い

何を書くか迷った

「どれを書くか戸惑った・思い出すのが大変」とする一方で「書きたいことがたくさん・楽しかったこと学んだことのどれを書こうか迷った」とする学生も多かった。

まとめるのは難しかった

「どうまとめればいいのか・どう表現するか・文章化するの難しい・実習日誌より大変・メモから思い出してエピソードにまとめるのは難しかった・考察が難しかった」と、文章表現が苦手、まとめるのは難しいと苦戦しつつ「伝わ

るかを考えた・イメージできるようにわかりやすく」などと、伝えよう伝わるようにと努力したことが伝わってきた。

「もっと言葉をメモしたり覚えたりしておけばよかった・園児や教師をもっとよく観察しておけばよかった・いろんな視点から見ればよかった」などと、まとめる以前の取り組みの大切さにも気付いていた。

「パソコンが辛かった」人は、習得する努力を続けてほしい。

まとめるのは楽しかった

「会いたくなかった・かわいさを思い出した・なつかしかった・また早く実習に行きたいと思った・日誌を見ながら思い浮かべ、様子や会話を丁寧に振り返った」などと、実習を楽しく振り返り、「決まればすらすら書けた・まとめるのは楽しかった・大変だったけれど楽しかった・ほほえましい気持ちになった・書きながら思い出してにやにやした」などと、楽しくエピソードを記述しながら保育者ならではの喜びも味わっていることが伺えた。

まとめながら考えることができた

「振り返り再び考え直すことができた・実習中は精一杯で深く考えられなかったけれど時間がたち、あの子はこんな気持ちだったのかと考えることができた・なぜそのような行動をとったのか考える中で、いろいろな考えが浮かんだ。言動を理解するには、その子自身のことをよく知らないといけないと実感した・先生や子ども達はどんな気持ちだったのか何を思ったのか改めて考えさせられた・あれでよかったのか、今後どうすべきか、もっとこうすればよかったかなと、援助や子どもの思いを改めて考えることができてよかった・自分がどうしたらよかったのか見つけ直すことができた」などと、記述することで考えたとしている。そのことが次につながっていくと実感したと思われる。

3. 幼稚園（9月2週の観察実習中）での

子ども理解を中心にした12のエピソード

全120点のエピソードの中から、12点を紹介する。幼児に接し、様々に感じたり考えたりしているエピソード選んだ。「幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることです」（『幼児理解と評価』）とあるように、まず、私たちは、いろいろな姿を共有し、幼児理解を進めたいと考えるからである。もちろん、エピソードの中には、担任の援助や自分の積極的なかわりに着目したのも多く、鋭く考察しているものもあった。

何気ない場面で、あるいはよくある状況等で子どもの姿が捉えられている、自分の思いや考えを述べるなどしっかり考察している、多くを紹介したいのであまり長すぎない等を考慮した。グループで選ばれて全体発表したものもあればその中に含まれなかったものもある。

エピソード1 「秘密基地!後で隠れるの!」 4歳児

柔らかい素材でできた大きな積み木で二人の女の子が遊んでいた。「先生も来て!」と誘われて私も一緒に積み木で遊んだ。「何を作っているの?」と聞くと「秘密基地!後で隠れるの!」とのこと。いろいろな形の積み木を組み合わせて園児が3人は入れるくらいの基地を作っていたが不安定な部分から崩れてしまう。それから何度も何度も崩れてしまうがその度に「次はこれ(積み木)をこっちに置いて、これはこうして・・・」と考えながら作っていた。やっとの思いでできた基地に園児たちは大喜びで「みんな隠れて!」と、途中から一緒に混ざって遊んだ子どもも含めて7人の園児で秘密基地ごっこをしていた。

<考察>

崩れるたびに自分達で考えて工夫している姿を見て、子どもの想像力はすごいなあと思った。また、何度崩れても嫌になるわけではなく、次は成功しよう!と気合が入っている姿を頼もしいと思った。

まさに4歳児らしい、友達とやりたいことを試行錯誤しながら実現していく姿を「すごいなあ」「頼もしい」と受け止めている。何がすごいのか。それは、何度崩れても積み木の形や重さ、バランスや見栄え、隠れられるようになどを考えたり、そうしたことを友達とやり取りしたりしながら遊びを進めていく力が育っているということだろう。また、「先生も来て」や「途中から混ざって遊んだ子ども含めて7人」と、子ども達は人のかかわりを積極的に楽しんでいる。

誘われて一緒に遊ぶことで、一層子どもの思いに触れることができ、子ども達もより親しみを感じたことだろう。

エピソード2 「あのね、妹が生まれたの」 5歳児

大きい組小さい組のペアで運動会の競技があった。大きい組は小さい組のプチお世話係のような感じだった。大きい組の男の子が小さい組の女の子に競技の説明をしたりずっと手を握ったりして、お世話をしていた。「偉いね」と言うと、にこにこしていたので何かあるなと思って「何かあったの?」と聞くと「先生には秘密～」と言われた。

給食の時「あとで教えてあげるね」と言い、耳打ちで「あのね、妹が生まれたの」と自慢げに教えてくれた。

<考察>

年長さんということもあり、とても自慢していた。兄弟は大切だなと思った。私の兄ちゃんもこんな自慢をしていたのかなと思った。この男の子は、少し寂しいような感じもした。その理由を「赤ちゃんに手がかかるからお母さんがかまってくれないということからだろう」と先生が言っていた。

「秘密～」と言いながらも「あとで・・・」と、子どもは打ち明けたい気持ちでいる。秘密を楽しんでおり、親しみを感じている先生に知ってもらいたくて耳打ちする。打ち明けられて「私の兄ちゃんもこんな自慢をしていたのかな」と

振り返り共感している。そして、兄となった嬉しさの一方で寂しさにも気づいている。

園での姿だけでなく家庭生活を知ることで見えてくるものがあり、援助の仕方もよりその子に添ったものにと工夫できるだろう。子どもも多様な感情経験をしている。

エピソード3 「お山が見えるんだよ」 5歳児

朝早く来ていたYちゃんから「先生、一緒にブランコに乗ろう」と言われたので一緒に乗った。乗る前にYちゃんから「お山が見えるんだよ」と言われ、私は不思議に思った。ブランコに乗らなくても園庭からまわりの山が見えるからだ。

一緒にブランコに乗りながら運動会の話をしていると「先生、お山が見えるよ!」と言われ、見ると、いつも園舎があって見えない向こう側の山がブランコを大きく漕いだ時だけ見えるのだ。「すごい、きれいだね」と言うとYちゃんはすごく嬉しそうな顔をしていた。その後、友達にも一緒にブランコをしながら教えていた。

<考察>

Yちゃんはいつもブランコに乗ってあのお山を見ていたのだと思った。大きく漕いだ時に見えるので、よく気づいたなと感心した。最初は、不思議に思っていたけれど、実際、子どもと同じことをすることでたくさんことに気づくことができた。子どもの目線に立つことは大事だと思った。

「お山が見えるんだよ」と言うのを不思議に思いつつ、誘いに応じてブランコに乗ったことで子どもの気づきを理解できた。「子どもの目線に立つて」とはよく言われるが、考察しているように、「実際、子どもと同じことをする」援助の大切さを具体的に学んでいる。

山に囲まれている園庭で、ブランコを大きく漕いだ時だけに見える向こう側の山。Yちゃんの大発見だ。大きくなっても忘れないのではな

いだろうか。それを「すごい、きれいだね」と受け止めてもらえて、先生への親しみの気持ちも深まっただろう。

エピソード4 「この指と一まれ」 5歳児

「この指と一まれ」とEちゃんが言うと「はい、はい、はい」とEちゃんの指をギュッと掴むAちゃんMちゃん。その姿を見守っているとEちゃんは「先生は来ないの？」と笑顔で手招きをした。「今日ね、折り紙で手裏剣を作ってきたの。で、いっぱいあるから先生にもあげるからこの指にとまって！」と言うので私がEちゃんの指を掴むと「はいー！もう締め切りー」と言った。みんなEちゃんの指を離すとEちゃんは鞆をあさりいくつかの手裏剣を床に散りばめた。

「どれにしようかな？」と私が口にすると「青はクールなんだよ」とMちゃんは私に教えてくれて「じゃあ、先生は青をもらおうかな」と言うとMちゃんは「それがいいと思う」と言った。「ありがとう。Eちゃんからもらえて先生とっても嬉しい！」と伝えると「どういたしまして。また明日何か作ってくるから待っててね」と笑顔でロッカーへ向かっていった。

<考察>

実習が始まって、まだ園児とどうかかわったらいいかかわらないでいたけれど園児の方から私に声をかけてくれた。それだけでも嬉しかったのに手裏剣もくれたことが「私ができることを園児達にしたい」と強く思うきっかけになった。園児の言葉はとても素直で自分の気持ちにきちんと向き合っていると感じたし、私自身も園児に倣っていくことで少しでも心の距離が近づけたような気がした。笑顔でいることは園児も意識してやっていることではないだろうけど、その笑顔は相手との距離を縮めていくのに必要不可欠だと改めて感じた。

実習始めてどうかかわったらいいかかわらな

いでいたとしながらも、元気で積極的なEちゃんの言動をきちんと受け止めて対応している。場の明るい雰囲気も伝わってくる。そして、Eちゃんとのかかわりで実感した、保育の場で何が大切かをしっかり考察している。子どもから学ぶ姿勢を大切にしたい。

エピソード5 「僕が守ってあげる」 5歳児

虫の苦手なH君がロッカーから荷物を取り出そうとしていた。ロッカーの前には大人の手のような大きなクモがいた。そこをたまたま通りかかったD君。D君は普段から皆と団体行動をするのが苦手な子。H君が「助けて、大きなクモがいる・・・」と言うと「僕が守ってあげる！」とD君はH君をかばうようにクモを追い払った。H君は一言「D君、ありがとう」と笑顔でいい、無事、荷物を取ることができた。

<考察>

H君は虫が苦手であるため、一切近づくことができない。逆にD君はいつもカマキリなど虫を触って遊んでいる。その時、たまたま通ったのがD君だったが、普段はあまり交流のない二人でも「ぼくが守ってあげる」とかばうようにクモを追い払っている姿を見てもごく友達思いなんだなと感じた。

その後、お礼を言われたD君は少し照れくさそうにしながら逃げて行った。普段は先生の言うことを聞かない少し手のかかる子だがとてもかわいいなと感じた。

「団体行動が苦手」「言うことを聞かない少し手のかかる」D君ということだが「友達思いなんだな」「かわいいと思った」と、新たな見方が加わった。意識してD君の言動を丁寧に見ていくともっといろんな面が見えて、D君像が変わってくるかもしれない。

ものや人とかかわる中で、また、いろいろな状況において、その子らしさが表れる。その子

らしさやその子の良さが発揮できるような関係や場や機会を作っていきたい。

エピソード6 「みんな隠れろ！」 5歳児

女の子5人とレストランごっこをして遊んでいると3人の男の子がばたばたと保育室に入ってきた。レストランごっこで使っている紙コップを持って行き、それを棚の上に置いた。私が「何しよんの～」と聞くと「もうちょっとしたらカブトムシが来るんで！やけん早く隠れて！」と言う。私は何のことかさっぱりわからなかったので、とりあえず隅に隠れた。すると男の子たちも隠れ、棚の上の紙コップの様子をじっと伺っている。

しばらくして男の子たちが紙コップをのぞいて「ああダメやった～」と残念がっていた。私は紙コップの中身が気になって見せようと、ままごと用のスイカのおもちゃが入っていた。

再び「カブトムシが来るぞ！」「みんな隠れろ～!!」という男の子達の叫び声が響き渡り、保育室にいた子ども達が一斉に隠れてカブトムシが来るのを楽しみに待っていた。

<考察>

おもちゃのスイカを本物に見立ててカブトムシが来るのを待っている姿はとてもかわいかったし、子どもの発想力は本当に豊かだなと感心した。また、遊びに周りの子ども達も惹きつけられ、最終的にみんなでカブトムシを待っている様子を見て、この遊びの影響力の大きさを感じた。

先生を巻き込み、その場にいた友達全員を巻き込んでいくこのパワー。友達の発想をおもしろく感じて楽しんでいる。こうした共通の関心事に向かう日頃の遊びがあって、それが共通の目当てとなり、互いに考えを出し合いながら工夫するようになる。

子どもの遊びを捉え発達を見通して、お話づくりや絵本作り、劇遊びやオペレッタなどの保

育を構想していきたい。

エピソード7 「ここは私のお風呂だよ」 5歳児

ジャングルジムで何人かの園児が遊んでいた。どうやら登って遊んでいるだけではないように見えたので「どんな遊びをしているの？」と聞くとHちゃんは「おうちごっこ！」と答えた。「じゃあここも何かのお部屋なの？」と、Hちゃんが登っていたところを指させば「うん！ここはね、私のお風呂だよ！」と答えた。すると離れたところを登っていたSちゃんが「こっちは私のキッチン！」と自慢げに教えてくれた。

<考察>

この時の環境として、自由に遊べる時間があり、好きなように使える遊具があり、一緒に遊んでくれる友達、そしてそれを見守ってくれている保育者がいる。

気付いたことは、私には何の変哲もないただのジャングルジムに見えるけれど、子ども達には様々な部屋に見えているのだろうということ。それも想像力が豊かに育っていている証拠かなと思った。私が「おっ、このドア開いているぞ～！」と、どろぼうを演じてみれば、あっという間にジャングルジムを使った鬼ごっこへと変わった。声かけ一つで子ども達の反応も変わり遊びも一工夫できることを学ぶことができた

楽しく遊んだのはどんな環境があったからか、前期の保育内容「環境」の授業で学んだことを活かして考察している。子どもや保育をより理解しようとする姿勢を大切にしたい。

ジャングルジムだからすなわち運動的な遊び、というのは大人の見方であって、子ども達は自在に発想し楽しむ。「おっ、このドア開いているぞ」と、子どもの遊びへ参加。ぴったりの言葉だったからこそ子ども達は受け入れ、鬼ごっこへ発展していったのだろう。子ども達の思いに添っていなければ保育者といえども遊びに参加させ

てもらえないものだ。「声掛けひとつで」と、保育者の援助の大切さを実感し学んでいる。

エピソード8 「先生、きれいにならんだ」 5歳児

園児たちは降園の用意をして絵本を読みながら帰りの会が始まるのを待っていた。先生が絵本を片づけるように言い、園児たちは持っていた絵本を片づけていった。

みんなが片づけている中、まだ絵本を読んでいたH君に「だれかな～、最後まで絵本を片づけない子は～」と私が言うとH君は急いで片づけに行った。しかし、本箱の前で本を出していたのでまた声をかけようと近づいていくと、H君はただ本を出しているのではなく本棚の本を背の低いほうから順に並べていた。そして、後ろにいた私に「先生、きれいにならんだ」と満足そうにして戻って行った。

<考察>

この幼稚園では特に最後の人が本を並べなければならないという決まりはない。H君は自分から進んで片づけていた。少し発達障害があり幼稚園が終わると時々施設に行き、訓練を受けている。普段から元気がよく活発で、いろいろなことに興味を示していた。

この日は、週に1度の絵本を借りる日で園児たちは絵本を借りる時、先生から「読み終えた絵本はきれいに片づけるように」と言われていた。そこで恐らくH君はそれを思い出して片づけたのだと思う。また、「ならべた」でなく「ならんだ」と言っているところがかわいかった。

降園前の濃密な時間。子ども一人一人のペースに応じつつ全体を掌握していかなければならなくて、つい子ども達を促しがちになる。そんな中でのH君の姿。近づくことによってH君の行動の意味や思いに気づき、「ならべた」でなく「ならんだ」と言っている」と着目している。H君への温かいまなざしを感じる。H君も嬉しく感じて自分から話したくなったのだろう。

丁寧に見ることで子ども理解が進み信頼関係もできてくる。どんなタイミングでどんな言葉をかけるのか、いつも考えさせられる。

エピソード9 「いいから気にしないで」 5歳児

5人が当番として前に出て「いただきます」の挨拶をする時、先生がテーブルの中にきちんと椅子を入れている席を見つけ「わあ、この席は誰かな？椅子がきちんとテーブルに入っていて素晴らしい」と言った。そして、その席のAくんが「僕の席」と手を挙げた。先生はAくんを「偉いね！」と褒め、他の子にも「A君と同じようにしようね」と言った。

するとAくんは自分の席の後ろに座っているBくんの所に行き、「僕の椅子、直してくれた？」と聞いた。椅子はA君が自分ではなかったBくんが代わりに下げたのだ。するとB君は「いいから気にしないで。前に行っていいよ」と言った。Aくんは「ありがとう」と言い、お当番の挨拶をするために前に戻って行った。

<考察>

先生がA君をほめてもB君は何も言わないで「気にしないで」と言えるところが大人だなと思った。A君もちゃんと自分はやっていないことに気づき、B君に「ありがとう」と言いに行けるところが偉いなと思った。そういった優しさが、二人だけが知っている本当のことが、二人の友情を更に深めたのではないかと思う。

「こんな場を見ることのできる保育者っていいでしょ。本当に大人ですねえ！」と思わずコメントした。担任には見えないでいるAくんとBくんの姿を捉え、それぞれの思いや関係を考察している。ますます親しみの気持ちや信頼感が深まり、充実感を味わったことであろう。二人は日頃の遊びでどのようなやり取りをしているのだろうか。更に知りたくなる。

エピソード10 「Yちゃんはここだよ」 5歳児

運動会のダンスの練習があった。その時、何度やっても自分の位置が分からずたどり着けないYちゃんがいた。Yちゃんは位置を間違えるたびに先生から何度も注意をされ、しゅんと俯いてしまっていた。

またやり直しになった時、先に自分の位置についていた園児が「Yちゃん！Yちゃん、ここだよ」と叫びながらおいでおいでと大きく手を振っていた。Yちゃんはそれに気づき、迷うことなく走っていき、遅れることなく自分の位置に立つことができた。その後も間違えることなくたどり着くことができた。

<考察>

この時の環境として、園庭、ダンスの練習用に引かれた白線、ダンス曲、フラフープ、一緒に踊る友だち、指導する先生、実習生がある。

気付いたことは、集団で演技をすると得意な子と苦手な子の差が出てくるということだ。得意な子は先生に教えられればすぐにダンスや移動を覚えるが得意な子が多い分、苦手な子がより目立ってしまう。

苦手なYちゃんは注意されればされるほど意欲をなくしてしまい、どんどん苦手意識を強くしてしまっている様子だった。しかし友達がサポートすることでYちゃんがスムーズに移動できることに気付いた。お互いが助け合うことで「頑張ろう！」とやる気を出すことにつながるのかなと思った。

Yちゃんをしっかり見つめている。Yちゃんをサポートする友達とそれに気づき行動するYちゃんの姿に「助け合うことがやる気を出すことにつながるのか」と学んでいる。

集団活動の場で、保育者は個と集団の関係に直面し、「一人一人を大切に」としながらも集団を優先させがちになる。子ども一人一人の様々な違いにどう対応していけばよいか考えや工夫を要する。違いから学び合えるようにと願

う。

友達とのかかわりが深まり、支え合うことができるようになるために、家庭や幼稚園での温かい雰囲気や友達関係づくりの積み重ねを大切にしたい。

エピソード11 「よくできたね」 5歳児

小学校のグラウンドで運動会のダンスの練習をしていた。普段は園庭でしていたため、広さが全然違い、子どもたちも間隔の取り方に戸惑っていた。その中でもダンスのリズムや移動が得意な子どもと苦手な子どもに大きく差が付き、バラバラになっているところが多く見られた。先生達は、まず苦手な子たちに徹底的に教えようとした。その時、自然と得意な子たちが苦手な子たちに教えてあげる姿が見られた。YちゃんはS君に「ここだよ！ここ！」と一つ一つわかりやすく教えており、出来るたびに「よくできたね！」と褒めていた。最後完成した時、ハイタッチしたりみんな喜んで喜ぶ姿が見られた。

<考察>

ダンスなども得意不得意があるため、今まで出来ていても環境が変わることによって出来なくなることが分かった。

だが、そこで得意な子どもが自ら不得意な子どもに教えている姿が見られて、自分のことだけでなく他の人のことも気にできるすごく気のきく子どもなのだと感じた。更に、その子どもを褒め、一緒に喜びを共感できる姿も見られ、最後はみんな喜んで喜んでいる姿も見ることができた。見ている自分も達成感を感じた。

前のエピソードと同じようにダンスの練習の場である。園庭からグラウンドへと広さが変われば子ども達の戸惑いは大きい。取り巻く環境については常に考え配慮・工夫したい。そんな中で、友達に教えたり教えられたりしてみんなが喜び合う姿を捉えている。

集団での生活が基盤となって、5歳児の後半

になると人間関係がますます深まり、友達の良さに気付いたり様々な自分と出会ったりする。伝え合う、一緒に調べる、教え合うなどの状況を作っていくことが指導のポイントとなる。

エピソード12 「よくなってよかったね」 5歳児

運動会の練習をするため小学校へ行く準備をしていた。B君も外に出ようと準備していたが靴を履いて歩きだすなり躓いて転んでしまった。膝を切ってしまって泣いているB君に、園児達は「B君、大丈夫?」「先生に言ってくる」と声をかける。先生が来て傷の手当てをしてもらった後、B君は「みんな、心配してくれてありがとう」と言った。

次の日、園児達は外遊びを終え、朝の会を準備していた。B君の近くの席の子ども達が「B君、足良くなった?」と聞く。「うんちょっと治ったよ」とB君。近くには座っていなかったが遠くからその会話を聞いていたC君も「そっかあ。よかったー」とつぶやく。しかしB君には聞こえていなかった。今度はB君に届く声で「B君よくなってよかったね」と言う。B君は「うん、C君、ありがとう」と答えた。

<考察>

私が実習に行った幼稚園の園児は、優しい子どもや友達の気持ちを考えて行動する子どもが多いと感じた。そして、先生に声をかけられなくてもしっかりと友達に気持ちを伝えたり感謝を口にしたりできると感じるが多かった。子ども達からは、自分の気持ちを相手に伝えたいという意欲が感じられた。

もうすぐ小学生になる年齢の子ども達は、徐々に集団の中で周りの人のことを考える力や自分の気持ちや意思を相手に伝える力をつけているのだとわかった。他にも虫を捕まえたあと、その虫が虫かごの中で弱らないようにみんなで考えたり、虫かごを閉めておく時に息ができるか心配する子どももいたりなど、心温まる場面が多くあった。

B君C君を中心に「集団の中で周りの人のこ

とを考える力や自分の気持ちや意思を相手に伝える力をつけている」と、子ども達の育ちを捉えている。保護者や保育者のかかわり方を含めてこれまでの多様な経験により子ども達の今の育ちがある。「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」幼児期の教育の終盤に入るこの時期の保育をどのように構築していくか、指導のポイントはどのようなことかなどを学びたい。

4. 互いのエピソード記録から学んだこと

初めての実習でのエピソード記録を通して学び合う姿は、保育について学ぼうとする真剣さの中に初々しさがあり、私は嬉しく受け止めた。以下、グループの友達と読み合ったり発表を聴いたりして、互いのエピソードから学んだとする学生の記述を記す。

エピソード記録の意味や意義を実感し、記述の仕方についても学んだ

- ・何を伝えたいか何に注目して何を思ったか、わかりやすかった
- ・題名からしてすごく楽しそうな、読む前からワクワク感がしてその場にいたいと思った。
- ・生活の何気ないことがエピソードにつながっている。よく見ているとどれも意味があつての行動だと改めて実感した。
- ・関心を寄せる光景も違えば子ども理解も異なり、私だったらうっかり見過ごしてしまうかもしれないような出来事を丁寧に観察している人もいた。
- ・どのようなことや何を書けばよいのかわかってきた。
- ・書くことで振り返りあの時もっとこうしておけばよかったと反省することができた。
- ・自分でとった行動を思い起こすことができ、もっと良い対応ができたのではないか。どうしたらよかったのか深く考えられた。書くことで反省できる。
- ・園児の言葉や教師の声掛けでその場の状況を

思い浮かべることができる。自分は、もう少し会話文もたくさんつければよかった。

- ・情景が想像できて話がすんなり入ってきた。子どものことをよく考えて援助しているし、細かいところまでよく観察している。
- ・子どもの気持ちを考えようとしている。子どもの発想に驚かされたり楽しんだりしている様子が伝わってきた。
- ・子どもの気持ちを汲み取ろうとする姿勢がひしひしと伝わってきた。心の深くまで考えて接し、考察している。
- ・短く簡潔にまとめることも読み手によく伝わる良い方法と気づいた。
- ・子どもの気持ちとそれを受け入れた後の自分の考えや気持ちが書かれていたので、内容をよく考えることができた
- ・声掛けが苦手で悩んだことなど自分の反省点もかいていてよい。
- ・ただ出来事を書くだけでなく、それを考察するのが私たちのやるべきことだと思った。
- ・他の人の思いや考えを知り対応の仕方を学んだ

子どもも先生も自分達学生も一人一人違いがあり、幼稚園にも特色がある。環境も援助も子ども達が経験していることも多様である

- ・幼稚園の特色が全く違い、様々な方針がある。
- ・同じ年齢でも園が違い環境が違うことで子どもたちが学ぶことも考えることも発言も全然違うことを感じた。
- ・園児はみな違う。個性があるということだ。私たち学生も個性があり、感じ方、とらえ方もいろいろで、エピソードのまとめ方が違い勉強になった。
- ・年齢が違えばできることが変わってくるのがよくわかる。
- ・どの子もそれぞれ違う行動や考え方をするととてもおもしろくてかわいらしい。保育者の援助も様々で面白いと思った。

・たった1週間でもいろいろな場面に出会うのだ。

- ・考察は自分の考えと違いおもしろかった。
- ・子どもへのかかわり方はワンパターンだけでなく何通りもあることが改めて分かった。
- ・いろんな思いで観察実習に臨んでいて、考え方や園児への対応に個性が出ていると思った。

幼児理解が進んだ

- ・おもしろく楽しく心が温まる。感性豊か。
- ・涙が出そうだったり思わずクスツツしたり、いろいろなことを思っているんだ。
- ・いろいろなタイプの子がいてかわいい。
- ・子ども一人ひとり感性の違い、豊かさがある。
- ・子どもながらも辛く悲しい現実を受け止めていることに感動した。
- ・無邪気で素直。発想の豊かさ・表現力が伝わってきた。
- ・子どもは何を考えているかわからないし不思議と思った。そこが面白いし、一緒にいて飽きない。
- ・子どもの興味や関心は広い。自分達で様々な工夫をして遊んでいる。
- ・少し厳しい援助に対しての子どもの強さを感じた
- ・いろいろな子どもがいて意思を持って発言している。考える力をもっている。
- ・自分たちで話し合い解決することができるのだ。私たちがすべて間に入るのではなく、考えさせ話し合う力をつけさせることも大切。
- ・1歳違うだけでも全然違うから子どもの成長は早いと思った
- ・子どもは素直。やりたいことや話を直接言ってあげることで通じ合える
- ・子どもは大人の気持ちを簡単に見抜ける能力があると実感。うわべの行動だけでは子どもに響かない。
- ・子どもは素直で人の感情を読み取ることがで

きてすごい。何事にも向き合う力をもっているのだな。

- ・子どもたちは素直に気持ちをぶつける場面が多く、特徴を捉えることができた。
- ・子どもから教えられることがたくさんある。発表を聞いて保育は本当に深いと感じた。
- ・思ってもみなかった行動をして私達では『当たり前』がそうではなくて、一人一人自由な発想があり予測不可能でとても楽しい。
- ・実習生として積極的に援助しているのに驚いた。その援助に対して帰ってくる子どもの反応が大人の私たちの考えをはるかに超えてくることに感動。
- ・発想が素直で面白いし、ある遊びに影響されて一体感が生まれたり誰かが発した言葉が影響して子どもたちを動かしたりするエピソードが多かった。
- ・子どもは悪い遊びをしてしまうことがあることを知った。注意するのではなく問いかけることが大切と思った。

保育者としての姿勢や援助の在り方に関心をもち、考えた

- ・何より子どもに視線を向けて行動することが大切。しっかり子どもを見ている
- ・環境や人間関係などで性格や遊びなども影響するんだな。面白いエピソードや考察がたくさんあった。
- ・何か事件を探そうとばかりしている自分に気づいた。日常の何気ない場面を切り取り、感じる力があるなあと思った。
- ・子どもの目線だからこそ気づくことがある。改めて大切と思った。
- ・援助の仕方を工夫している。参考にしようと思った。
- ・その場の雰囲気を読み取る力も必要。
- ・どう援助するかが大切。自分はあまり考えて援助をしていなかったと反省。お手本にもなった。

- ・自分だったらどう対応するだろうか等と考えながら発表者のエピソードを聞くことができた
- ・対応にその人の子ども観があらわれていた。根本的なところは同じだけれど保育者の個性が出ていて面白いと思った
- ・子どもを叱ったときどうしてかを直接担任に聴きに行つて意図を知ろうとしていてすごい。質問したり報告したりする大切さを知った。
- ・先生方の言動はすごい。一人一人のことを考え性格も考え援助している。現状で判断するのではなく過程も大切と気づかされた。
- ・経験していることの意味や援助の意図などを考えさせられる。他の人の発表を聞くことで援助の仕方やどんな視点で物事を考えていったらいいか分かった。
- ・他の人の対応から自分を見直すことができた。
- ・自分の援助はよかったのか、もっと他にあったのではないかと考えることができた。
- ・私だったらこの場面にどう対応しようと考えた。考察を読むとまた考えが変わったりして勉強になった。
- ・援助に必死になりすぎて自分が心から楽しむことを忘れていた。
- ・まだ、援助や声掛けが自分はできていないと感じた。負けずに頑張ろうと思った。みんなの事例を読みたいと思った。楽しかった。
- ・まだ知らないことがあったり間違っただけを覚えていたり叱らないといけないことをしたりした時、いきなり否定するのではなく子ども達にまず問いかけて自ら気づくようにすることが大事だと改めて理解した。
- ・全員が納得するためにどうしたらいいか考えたり、あえて手や口を出さずに図鑑を使わせるなど子どもの自主性を引き出すようにしたりして、子ども達が自分で行動するようにみんな考えている。

- ・少しでも様子が違うときは声をかけて話を聞くことが必要と思った。
- ・ちょっとした援助で子どもが楽しく遊べる。興味をもって遊べる援助は必要。しかし、いつでもなんでもでなく、子ども同士で解決も大切。
- ・たくさん見直したい点を学べた。ただ見守るだけでなく声掛けが必要。
- ・保育者が答えを言うのではなく、よいか悪いか子ども自身にわかってもらうことが必要。
- ・その子が興味をもつような声掛けが必要だ。現場では考えてもみないことを子ども達は起こしており、いい方向に進むことを学んだ。
- ・否定する前に子ども達に考えさせ、良いこと悪いことを考えさせることも大事。
- ・援助も、子どもに合わせて時には強く、強く言った後は抱きしめるなどして、愛情を感じた。
- ・声掛けや援助で子どもの気持ちや行動は移り変わるのだと分かった。難しいけれどとても大切なので、しっかり考えて援助しなければならない。
- ・時には叱ることも大切。その子の性格も踏まえて考えている。

今後どうあればよいか考えたり方向性を見出したりした

- ・積極的に質問してすごい。考えや援助の仕方を学べた。現場の先生達のような援助ができるようにしなければいけないと思った。
- ・子ども達の素直な表情や行動をもっと次の実習で観察できるようにしたい。
- ・「遅くてもいいんだよ」「1番がいいんじゃないんだよ。最後までがんばることがいいんだよ」という言葉が子どもの口から出ることがすごい。将来、自分もそのように子ども達に言いたい。
- ・子どもの気持ちを第一に考えて対応していて自分もそのように子どもを尊重したい。

- ・発想力を大切にしたい。
- ・思いつかないような援助やよいと思う援助の真似をしようと思った。
- ・発表を通じて今まで知らなかったクラスメートの一面を知ることができた。口数の少ない子どもに向けられた温かい目線や細やかな気遣いを感じ取ることができた。子どもに限らず人の内面はあまりに深く、知ろうとしなければわからないこと見ようとしなければ見えてないことのほうが多いのだと思う。クラスメートの良いところを自分からもっと探してどんどん見つけていきたい。
- ・「こうに違いない」と子どもの気持ちを決めつけてみることの怖さを考えた。できるだけ子どもの気持ちに寄り添った保育者になりたい。
- ・思い込みを捨てて素直な気持ちと目で子どもと向き合える大人になりたい。
- ・子ども達とかかわる中で、小さなことでも気づいてあげることのできるような保育者になりたい。
- ・子ども達が何を考えているか考えながら観察したい
- ・皆が同じ考え方や発見をするのではないことに気づいた。もっと「気づきの視点」を深めていこう

5. まとめ

「とても分かりやすく教科書の事例よりもうまいと感じた」と記した学生がいる。学ぶもの同士として友達のエピソード記録を身近に感じたと思われる。互いに読み合うなどして他の見方や考えを知ったことは、今後の授業や学生生活の中に生かされると期待したい。

課題は、観察実習を通してのこのような学びを一人一人がどのように活かしていくかであろう。また、教員も、各授業をどのように関連させていくか改めて考えていくことではないだろう

うか。

「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」幼児期の教育において「主体性を育てる」「一人一人を大切に」「子どもの目線に立って」「環境を通して行う教育」などと理解していても、保育の場でどうあることなのか。具体的にどのような様子や姿を描くだろうか。自分ではそうあろうと言動しているようでも、振り返ったり他者からみたりするとブレに気づくことも多いように思う。

園も子どもも、環境も状況も方法も、多種多様な中で、何を選び何を大切にしていって保育を進めていくのか。ものの見方や考え方を深めたい。

「速断せずに期待しながら見ていることによって、今までわからなかった可能性が明らかになり、人間が変化していくことは素晴らしいことである」（『こころの処方箋』）、「自分の行為に関心をもって見守ってしてくれる人が存在することによって、その子どもに潜んでいた可能性が動き始めるのである」（『子どもと学校』）「有難い先生よりももっとほしいのはうれしい先生である。そのうれしい先生は、その時々のもち共感してくれる先生である」（『育ての心』）などの先人の教えを胸に抱きつつ、学び続けたい。

参考図書

『幼稚園教育要領解説』

文部科学省 フレーベル館

『保育所保育指針解説書』

厚生労働省編 フレーベル館

『幼児理解と評価』

文部科学省 ぎょうせい

『指導と評価に生かす記録』

文部科学省 チャイルド本社

『保育のためのエピソード記述入門』

鯨岡峻・鯨岡和子 ミネルヴァ書房

『多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める指導の在り方』

（国立大学附属幼稚園からの提案10）

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

『こころの処方箋』

河合隼雄 新潮文庫

『子どもと学校』

河合隼雄 岩波書店

『育ての心』

倉橋惣三 乾元社